

## どもる人のための大阪吃音教室の実践

報告 大阪スタタリングプロジェクト 東野晃之

### はじめに

大阪スタタリングプロジェクトの大阪吃音教室では、どもる人が、吃音との上手なつき合い方を学ぶために、年40回程の吃音講座を中心としたスケジュールを組んでいる。そのうちの「自分のどもりの課題を知る～言語関係図を通して～」の実践を報告し、「哲学的対話」について考察したい。

報告にあたっては、大阪スタタリングプロジェクトの機関紙「新生」2017年3月号巻頭、大阪吃音教室だより「自分のどもりの課題を知る～言語関係図を通して～」、7月・8月合併号巻頭より引用した。

### 哲学的対話とは

哲学的対話とは、幾つかの条件はあるものの、「自分の人生の実感や体験を通して語ること」、「社会通念や常識に収まることを避け、常に新しい領域に向かっていくこと」が、その要旨であると解釈できる。

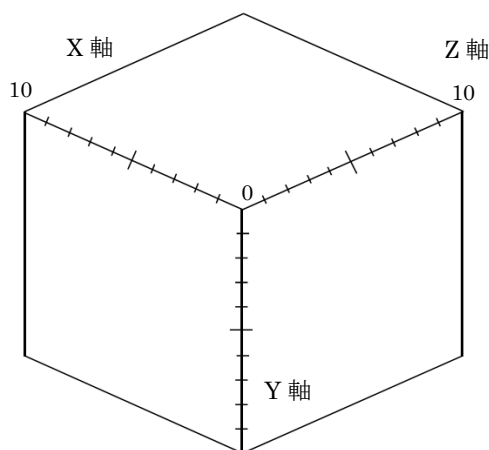
大阪吃音教室では当事者が自分の経験を通して語り合い、悩みや問題解決に向けて話し合いが行われる。それらの語りや話し合いそのものが、哲学的対話だろう。

私たちの吃音は、発声訓練や言語訓練で変わってきたのではなく、自分の経験を通して語るという哲学的対話を深めるなかで変わってきたといえる。

### 「自分のどもりの課題を知る～言語関係図を通して～」

アメリカの言語病理学者のウェンデル・ジョンソンが考案した言語関係図は、吃音の問題をどもる状態（X軸）、聞き手の反応（Y軸）、本人のどもる状態や周りの反応への受け取り方（Z軸）の3つの視点で図形化し、悩みの箱として捉える。大阪吃音教室では、自分のどもりの課題を知るために自己評価で自分の言語関係図を作り、それをもとに話し合う例会を続けている。

#### ◎言語関係図



(中心を0として、それぞれの最大を10とする)

(縦)×(横)×(高さ)=(体積)  
 $X \times Y \times Z = \text{悩みの大きさ}$  とされる

	(0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10)
X軸...どもる状態	(あまりどもらない ← → ひどくどもる)
Y軸...聞き手の態度	(吃音に理解がある ← → 吃音に否定的)
Z軸...本人の受け止め方	(あまり気にしない ← → ひどく気にする)

一般的には、どもる状態（X 軸）が強ければ、聞き手の反応（Y 軸）も、吃音に対する本人の受け取り方（Z 軸）もより否定的で、本人の悩みは大きいと考えられる。しかし、実際には必ずしもどもる状態と悩みの大きさは比例しない。どもる状態は強くても聞き手の理解が得られ、本人も吃音をあまり気にしないことがある。また表面的にはほとんどどもらないが、本人が吃音を否定的に捉え、聞き手の反応を気にして隠すなど悩みが大きいことがある。

## 陰の Y 軸への洞察

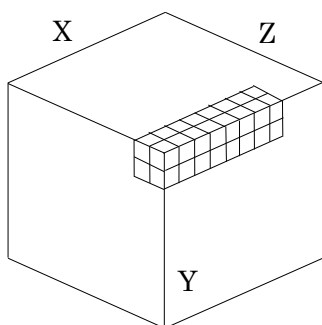
会話では吃音を隠し、表面的にはほとんどどもらないため聞き手の反応は得られず、吃音に対する本人の受け取り方は「どもってはいけない」と吃音に否定的である。このような人の言語関係図を表すと、

X 軸、Y 軸の数值は低く、Z 軸だけが高い全体として小さく細長い悩みの箱になる。（図 1）

だが、表に出ない心の中での言語関係図は違うのではないかと話し合いで異論が出された。否定的に吃音を受け取る高い Z 軸の影響で、どもったら周りの人は否定的に捉えるだろうと想像して考えると、陰の Y 軸の数值は高くなり、悩みの箱はもっと大きくなるのではという洞察である。（図 2）

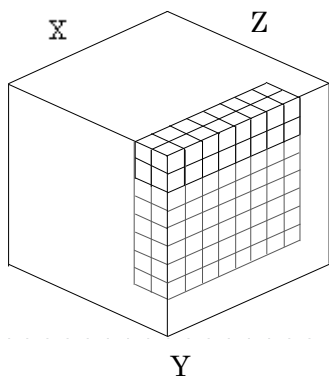
例 3) C さん：会話でどもらないようコントロールをしていて、吃音に関する周りからの反応はなく、吃音に対するとらわれが大きい。

図 1



X...どもる状態<sup>2</sup>  
 (隠しているため、数值が低い)  
 Y...聞き手の態度<sup>2</sup>  
 (隠しており聞き手の反応自体が得られないため、数值が低い)  
 Z...本人の受け止め方<sup>8</sup>  
 (「どもってはいけない」と思っているため、数值が高い)

図 2



陰の Y 軸があれば、C さんの言語関係図はずっと大きくなる

## 陰の Y 軸についての発言 ～話し合いによる哲学的対話～

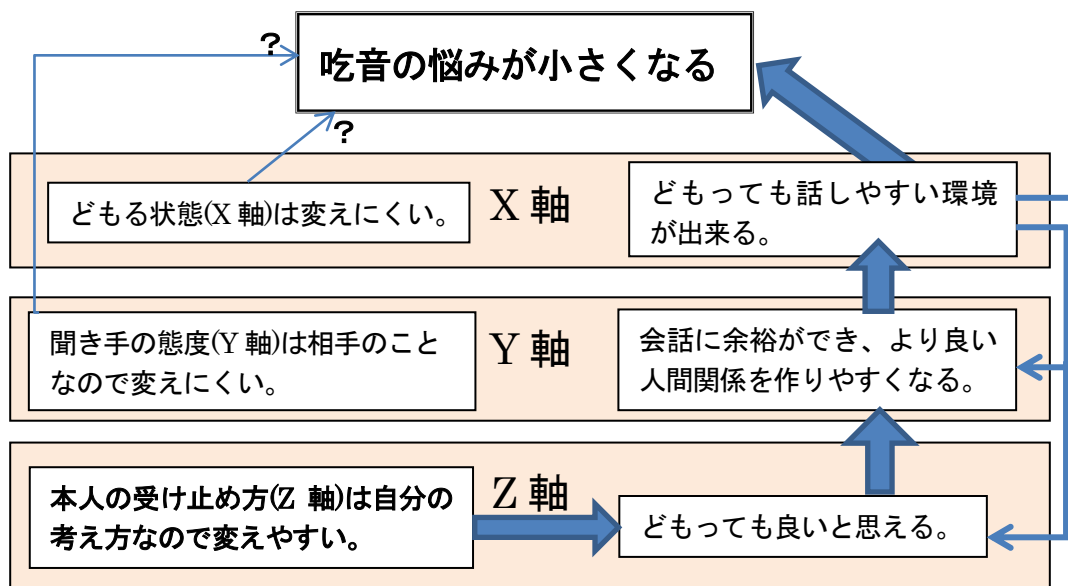
○C さんが周りの人は否定的に捉えるだろうと考えていけば Y 軸は高くなるかもしれない。隠しているということは高いのでは。

○聞き手が受容的な態度ではないと考えると Y 軸は高い。表にあらわれた言語関係図はこうだが、心の中の言語関係図は違うのかも知れない。

- どもりを隠しているので聞き手の反応を直に感じる事が出来ない。少しでももったら周りの人たちにバカにされるのではないかと、想像の世界に生きている。
- どもりを隠していた私は、Cさんのような感じ。実際にもっていないように話しているから、もったら関係が変わってしまうと思っていた。つまり陰のY軸が高かったかもしれない。
- どもりを隠している限りは、相手にどんな反応をされるか分からないので安心できない。
- 自分がもった時、実際何も言われていないことが多いのに、勝手にマイナスな反応として受け取ってしまう。自分がどもりに悩んでいる時に、フォローしてもらったとしても、自分が吃音を受け入れている時期は、相手のフォローさえ、ネガティブに捉えてしまう。
- 凄くもっている時は、自分の話すことに必死で、相手の反応を見る余裕がない。Y軸は想像ではない。ポジティブな反応すらネガティブに受け取ってしまう。善意な声掛けも悪意に捉えてしまう。

## 講座の感想・まとめ

- Z軸が変わると、相手（聞き手）に対する見方や理解が変わる。
- Z軸が変わると、自分の吃音にばかり向けていた視線が、相手（聞き手）に向かう
- 想像の中で、相手の吃音に対する否定的な態度を恐れ、人間関係に苦手意識を持ち、消極的になった。
- 周囲に吃音の悩みを打ち明けたことで理解が得られ、悩みが少なくなった。
- （前の発言に対して）周囲に恵まれたが、本人が悩みを打ち明ける素直さが大切。吃音の劣等感が強すぎると援助を否定してしまうことがある。
- 昔はZ軸が最大、自分がどもると、相手の自分への見方が変わってしまうと思っていた。しかし、実際どもっても関係は変わらなかった。昔は想像の世界で怖がっていた。
- 自分がどもりを隠さないようになってわかったことは、吃音を知らない人が吃音を目の当たりにすると驚くのは自然な反応であるということ。
- （前の発言から）もったときの実際の相手（聞き手）の反応を知ることができた。
- 本人の受け取り方のZ軸は自分の考え方なので最も変えやすい。吃音に対する否定的な考え方が変わると、会話に余裕ができY軸の聞き手の反応を受けとめることができ、人間関係が良くなる。人間関係が良くなると、X軸のどもる状態も話しやすい環境に変わる。
- Z軸を何とかするために大阪吃音教室に参加した。だが、ここではZ軸のことだけでなく、人間関係をよくする講座もある。一見遠回りに見えるが、吃音の悩みを解消する方法に近道はなく、自分の考え方、人付き合い、言葉について考え直していくことで、吃音の悩みが小さくなっていったと思う。



## おわりに

大阪吃音教室では、その日の講座を切り口に、自分の経験を通して参加者が語り合い、悩みや問題解決に向けて話し合う。参加者同士の語りや吃音体験を文章に書き、発表し合う経験などが繰り返し、行われるなかで、知らず知らずのうちに哲学的対話は深められてきたようである。報告した、陰の Y 軸への洞察は、当事者の実感や体験を通し、言語関係図の理解を深めたものである。

参加者同士の語りや話し合いが、参加者にとっては吃音肯定につながるメッセージとなり、人間関係やコミュニケーション力を高め、吃音との上手につき合いに活かされてきたと思われる。